様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月１５日現在

機関番号：１２７０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2010～2011
課題番号：２２６５３１１６
研究課題名（和文）　「言語力」育成に機能する書字教育カリキュラムの開発

研究課題名（英文）　Development of handwriting education curriculum for linguistic competency

研究代表者
青山　浩之（AOYAMA　HIROYUKI）
横浜国立大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号：40323919

研究成果の概要（和文）：本研究では、国語科の「文字を書くこと」に関する学習の効率化・最適化を図るために、これまで別立てのカリキュラムとして行われてきた書写学習を、国語の言語活動の学習などと効果的に関わらせる方法を実践的に考察し、「言語力」の育成に機能する書字教育カリキュラムを開発した。その過程で、紙面の書きまとめ方により内容理解が高まる点や、要点・キーワードを判断し、速く、見やすく書きとめるメモが内容理解の正確さにもつながる点などを確かめることができた。

研究成果の概要（英文）：In the present study, “handwriting education curriculum for linguistic competency” was developed to improve efficiency and promote optimum function of learning concerning “writing character” in Japanese, discussing the methods to associate “handwriting education”, which has been done as a separate curriculum, with “Learning about linguistic activity of Japanese”. In the process of this study, the followings are confirmed.
1) Methods of writing / summarizing space increase understanding the contents.
2) Memo jotted down, recognizing of chief points and keywords, increase accuracy of understanding.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	500,000	0	500,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,000,000	150,000	1,150,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：教育学・言語力・書字・カリキュラム・国語教育・書写教育・言語活動・書くこと

１．研究開始当初の背景

(1) 国語科教育研究の視点から

国語科教育研究において、書写学習と他の言語活動とを関わらせた研究、あるいは文字・表記・語句等の学習と書写学習とを統合的に再組織しようとした研究は、これまで体系的には行われてこなかった。かつて青木（『第三の書く』青木幹勇、国土社、pp. 13、1986）は、書写を「第一の書く」、作文を「第二の書く」、そしてそれ以外に大切な学習として「第三の書く」を挙げ、視写・聴写・メモ等を例に取り、聞くことや話すことを支える「書くこと」の存在を指摘した。そのような指摘がありながら、これまで「言葉の力」と「文字を書く力」の関連を図った教育研究の枠組みが開発されてこなかった。

このことに対し、本研究代表者である青山は、言葉や思考を効果的に書きまとめたり、内容を整理して読みやすくまとめたりといった点について、「聞き取り」の際のメモや、「観察記録」等をもとに、初等・中等教育段階の児童・生徒の書字資料を分析し、書字の情報的機能に関わる能力の実態と問題点を明らかにする研究を進めてきた。

それらの成果の一部は、研究代表者・青山の「学習者の言語活動に機能する国語科書写のあり方について」(『書写書道教育研究』20号、2005）や「言語活動に機能する書写の学習－目的・相手への意識化を図ることの課題と実践－」(『月刊国語教育研究』416 号、2006）の中で指摘し、「言語力」を高めるための書写学習について、概括的な方向性は示唆してきている。ただし、言語活動を統合的にとらえ、書字の意識や技能と有機的に関わるようなカリキュラムや教授法の開発までは至らなかった。

(2) カリキュラム開発の視点から

明治初期のレター・メソッド以降、文字の習得（文字学習）と書き方の習得（書写学習）とは別々の枠組みで捉えられてきており、また、表記の方法や語句の習得などに関する研究も、同様に書写学習との関連性は考えられてこなかった。したがって、日常の言語活動場面では、本来、ＴＰＯに合わせた「書き方」が求められるはずであるのに対して、そうした観点からのカリキュラムや教授法の開発が行われていないのが現状である。

例えば、書く速さも求められる「聞きながら書く」といった場面を想定した場合、「要点をまとめて書く」という国語学習と、「速書の技能を身に付ける」という書写学習が、それぞれ関連してこそ実際の場面に機能する言語力となりうるはずである。しかしながら、実際の教育活動では、双方の学習が乖離した状況で行われている。また、学習者の実態を見ると、そのどちらにも当てはまらない表記や書字方法を行っている事例が多く見られる。すなわち、「聞き取った語句や単語を、平仮名で、小さく書く」といった、学習者独自の効率化を図ったメソッドが自然に定着しているようにも見える。一見、見過ごしがちなこうした実態は、従来の枠組みにおける指導方法の限界を示唆しており、「聞く」－「書く」などの往還において必要となる言語の能力を措定した上で、実状に合わせたカリキュラム及び教授法開発への方向転換が必要であると考える。

２．研究の目的

そこで、本研究では、国語科の「文字を書くこと」に関する学習の効率化・最適化を図るために、これまで別立てのカリキュラムとして行われてきた書写学習を、国語の言語活動の学習などと効果的に関わらせ、「言語力」の育成に機能する書字教育カリキュラムを実践的に研究・開発することとした。

具体的には、

① 実際の国語の言語活動や文字・表記・語句等の学習と書写学習との関連性を検証する。
② 育成を目指す書字能力を措定する。
③ 措定した書字能力を育成する新たな視点の「書字学習」を組織し、カリキュラムと教授法を開発する。

３．研究の方法

(1) 問題の所在と理念の明確化

従来の文字・表記・語句等の学習や国語の言語活動に関する学習と書写学習のカリキュラムに関する問題点を検討し、整理した。

その上で、それぞれの学習の共通点と相違点及び関連性等を検討し、新たに提案する「書字学習」の理念について考察した。

(2) 育成を目指す書字能力の措定

新たに提案する「書字学習」によって育成する書字能力を措定するために、文献による整理だけでなく、実際の授業を記録し、教員から直に情報を得るなどして分析を進めた。

(3) 学習内容の設定と組織

育成を目指す書字能力と関わらせながら、学習内容の設定、組織化を進めた。

その中で、特に「書きまとめる力」の視点から「ノートテイク」について実践的な研究を行い、具体化を図った。

(4)「書字学習」のカリキュラム案の作成

以上を通して新たに提案する「書字学習」のカリキュラム案を作成した。

(5) シミュレーションによる検証

新たに提案する「書字学習」のカリキュラム案を、国語科の他の領域との関係において機能するか理論的検証を行い、明らかになった問題点について先進地区の小学校や本学部附属小学校等において実践的検証を行った。その上で、改善点を整理し、考察した。

４．研究成果

(1)「書きまとめる力」の視点から見えてきたこと

まずは、主に研究の前半部分にあたる「育成を目指す書字能力の具体化」や「学習内容の設定と組織」に関わる成果を、具体例を挙げながら述べる。

学習者がノートを取る活動（ノートテイク）は、国語の言語活動ばかりでなく、各教科の学習における言語活動にも深く関わるものであり、内容的・視覚的に整理され、読みやすく見やすいノートの紙面を作成する力が必要となる。そこで、まずは各教科のノート使用の実態やノートに対する学習者の意識等をアンケートにより把握してみると、教科ごとの特性があり、教科や目的によって効果的な書きまとめ方にも違いがあることが分かった。また、多くの教科で横書きのノートを使用していることから、小学校第６学年を対象に、横書き書字の実態を把握してみると、文字の大きさや行の中心といった点に加え、書き出しの位置という、内容理解等にも関係する点に課題が見られた。アンケート調査では、多くの学習者が「見やすさ、見にくさ」の理由として「書きまとめ方」を挙げているが、書き出しの位置を工夫した箇条書きができていない学習者が多い実態が明らかになったことによって、学習者が、効果的な書きまとめ方や読みにくさ・見にくさに対する解決策を具体的にイメージできていない可能性が考えられた。

以上の結果から、効果的な箇条書きの書きまとめ方を学習内容として設定し、授業実践を行った。一定の話を聞き取ってまとめる活動を通して、内容に応じて書き出しの位置を適切に変えて箇条書きのできる学習者は、当初 53%であったのに対し、授業後は 74%と増加し、また書かれた内容の適切さも、78%

から84%へと向上が見られた。書き出しの位置を意識して箇条書きをすることは、話の内容を頭の中で整理することにもつながり、ひいてはより正確な内容把握・内容理解にもつながる。

このようなことから、見やすく読みやすい紙面について考え、工夫して書きまとめる書字能力が学習者の言語活動を支える点を確かめ、学習内容の設定、組織化を具体化することができた。

(2)「メモの効率を向上させる」視点から見えてきたこと

次に、主に研究の後半部分にあたる「カリキュラム案の作成」や「シミュレーションによる検証」に関わる成果を、具体例を挙げながら述べる。

前述の（3）で挙げたノートテイクにも関わる点で、「聞いて書く」という日常的な書字場面において、聞き取ったことを正確に、ある程度速く書きとめる力をつけるにはどのようなカリキュラムが効果的かを、国語力と書写力の双方の観点から実践的に検証した。具体的には、「速書」という書写的な要素と、「内容を理解し要点をとらえる」という国語的な要素を関わらせることにより、効率よく効果的なメモを取る力（メモ力）を育成するためのカリキュラムを検討する。

小学校第6学年を対象とし、前提となる学習者の速書力を把握してみると、1 分間書字で平均 67．2 字と一般的な水準であったが、書字の質には課題が見られた。まずは、平均の文字数よりも多く書字した学習者は書字の質が著しく低下する。一方で、平均より文字数が少ない学習者の文字質も同様に低い結果となった。むしろ平均に近い文字数を書いた学習者の文字質が最も高く、速書をしてもある程度の文字質を保てるといったバランスのよい書写力を身につけていることがうかがえた。こうした実態から、まずは普段の系統的な書写学習の中で基本的な書写力を習得しておく必要性が指摘できる。

その上で、聞き取り活動を行わせてみると、速書力の高い学習者が必ずしもメモ力が高いわけではない結果が得られた。事前に行った速書調査と聞き取り活動のメモを比べると、書字した文字数の偏差値が同程度であった学習者の割合は3割程度であり、残りの学習者は偏差値に5以上の差が見られた。また、速書調査の文字数とメモの文字数の相関を見ても、0．182（有意確率0．065）と、学習者の速書力とメモの量に高い相関は見られなかった。これは、学習者のメモ力が、速書力だけでなく、内容理解、聴覚的記憶などの様々な要素から成り立っていることを示している。さらには、メモ活動の後に内容についての質問に答える活動を行った際に、メモの量と回答の正確さ、メモの書きまとめ方と回答の正確さ、それぞれに関係性が見られた。すなわち、メモの量が多ければ問いに正確に答えることができ、箇条書きでまとめたり、意識的に内容を整理してメモを取ったりすることによって正確さが増すことが確かめられた。

以上の検証により、国語力としては、①内容を理解し、要点やキーワードを判断する力、②それを紙面に簡潔に書きまとめる力。書写力としては、①読みやすく速く書く力、②紙面を整理し、見やすく（読みやすく）メモを書きまとめる力。これらが効果的なメモ力の基礎的な力となり得ることを実際に明らかにできた。そして、こうした能力の必要性と具体的な関連姓を確かめ、カリキュラムの改善を図った。

(3) 今後の課題

以上のように、本研究では、これまでの国語科の言語活動や文字、表記などの学習研究、

及び書写学習研究の視点とは異なり、それらがどのように関わるのかを考察し、実践的・理論的検証を通して、措定した書字能力の育成に機能する「書字学習」のカリキュラム案を示した。

その中で、「言語力」育成に機能する新たな「書字学習」の枠組みは概ね提案することができ、この分野の学究の萌芽となったといえる。しかしながら書字が関わる言語活動の範囲は広く、すべてを実践的に検証することはできなかった。今後も、言語活動のあらゆる場面での書字活動を対象とした理論的・実践的な研究の広がりが考えられる。また、書字能力の措定によって書字原理を究明し、「書字学習」に関する新たな方法論の提案を行う過程で、国語科及び書写領域において従来行われてこなかった研究の手法についても同時に開発することができると思われる。引き続き、広い視点から学究に取り組みたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 青山浩之、柳澤ももこ、メモの効率を向上させる国語力と書写力についての考察、書写書道教育研究、査読有、26 号、2012、70－79
② 青山浩之、国語科における言語活動の充実、伝え合い高め合い学びを生かすことのできる子どもの姿を目指して（藤沢市教育文化センター国語科研究部会集録）、査読無、2012、6－18
③ 柳澤ももこ、青山浩之、言語活動を支える書写の実践的研究－読みやすく見やすいノートの書きまとめ指導を通して－、書写書道教育研究、査読有、25 号、2011、41－51
④ 青山浩之、言語活動に機能する書写、月刊国語教育研究、査読無、467 号、2011、28－31

〔学会発表〕（計５件）

① 青山浩之、柳澤ももこ、メモの効率を向上させる国語力と書写力についての考察、全国大学書写書道教育学会、2011 年 9 月 19 日、茨城県立県民文化センター（茨城県）
② 青山浩之、書写の授業づくり－自ら課題を持ち学び合う書写授業の展開－、日本国語教育学会第 74 回国語教育全国大会、2011 年 8 月 9 日、日野学園（東京都）
③ 柳澤ももこ、青山浩之、言語活動を支える書写の実践的研究－読みやすく見やすいノートの書きまとめ指導を通して－、全国大学書写書道教育学会、2010 年 10 月 1 日、北海道教育大学旭川校（北海道）

〔図書〕（計５件）

① 日本国語教育学会編、朝倉書店、国語教育総合事典、2011、844（626～628）
② 青山浩之、日本経済新聞出版社、気持ちが伝わる「手書き」ワザ、2010、192
③ 青山浩之、小学館、こうすればきれいな字が書ける、2010、168

６．研究組織

(1)研究代表者

青山　浩之（AOYAMA　HIROYUKI）
横浜国立大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号：40323919

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：